上総の国いちはらにおける

平将門の伝説(北部編)

上総国分寺境内に移設された将門塔

上総の国いちはらの歴史を知る会

（ふるさと市原をつなぐ連絡会　会員）

令和４年８月　編集・制作

上総の国いちはらにおける平将門伝説

平安時代末期、平家一族の栄華の時代に生まれ、関東に武士を中心とした都を作ろうと新皇を名乗り、京の朝廷をまねて文武百官を任命し、王城建設を議するに至りました。しかしその後、従兄弟の平貞盛と藤原秀郷の連合軍に合戦で敗れて戦死した平将門の上総国市原郡での伝説を紹介する。

平将門の武者姿

平将門の肖像画

平　将門伝説

生い立ちと平家一族の争い

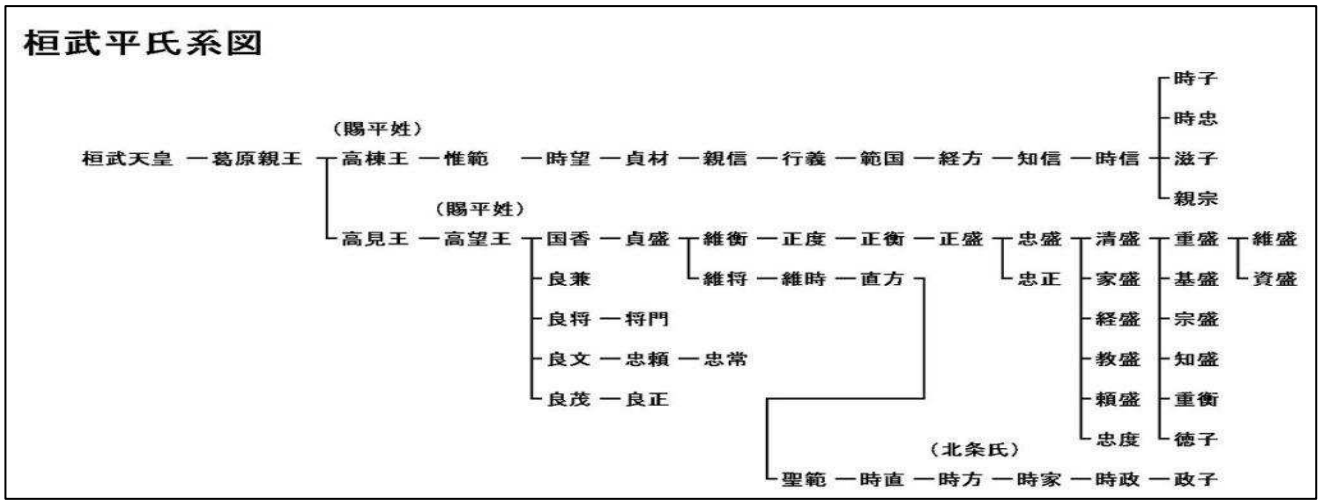
平将門の生年は９世紀終わりごろから１０世紀初めと言われているが、正確には不詳です。一説では打ち取られた年齢が３８歳とされることから、延喜３年（９０３年）とする説と寛平元年（８８９年）や元慶８年（８８４年）とする説がある。

父の平良将は下総国佐倉が領地と言われ、佐倉市には将門町という地名も残っているが、根拠となる資料はない。幼少の頃は母の出身地である相馬郡で育ったことから「相馬小次郎」と称していた。

将門は１５歳から１６歳ごろに平安京へ出て、藤原北家の氏長者の藤原忠平を主君として仕えた。将門は鎮守府将軍である父を持ち、自らも桓武天皇の五世でしたが、藤原氏の政権下では滝口の衛士でしかなく官位は低かった。平安京には１２年いて当時の軍事警察を管轄する検非遣使の役を望んだが入れなかった。

その後に将門は東下するが、その際伯父の平国香らが上野国花園村（現在の高崎市）の染谷川で将門を襲撃したが、国香の弟にあたる平良文が将門を援護し、これを打ち破っていると言われているが、妙見社を讃えるための創作されたものという説がある。

平将門一族と源頼朝とは、北条家を通じて関係があったが、誰でしょうか？



平将門の乱が起きた原因

・領地の相続での争いー叔父の国香や良兼が独断で分割してしまい争いが起きた説
・常陸国の源護の娘、或いは良兼の娘をめぐる争い説
・源護と平真樹の領地争いに介入しての争い説
・坂東平氏一族の争い「源護の縁者と将門の争い」説
・平良将が築いた陸奥国の基盤や将門が築いた常総地域の道路や内海などの交通網めぐる争い説など諸説あります。

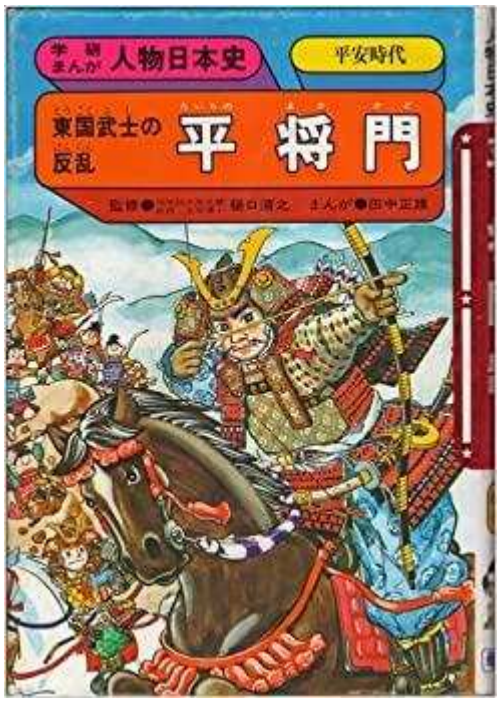
・承平５年（９３５年）２月に将門は源護の子・扶らに常陸国真壁群野本（現筑西市）で襲撃されるが、これを撃退し扶らは討ち死にした。
将門はそのまま大串・取手（下妻）から護の本拠地である真壁郡に進軍して護の本拠を焼打ちし、その際の伯父の国香を焼死させた。同年１０月に源護と姻戚関係にある一族の平良正は軍勢を集め鬼怒川沿いの新治豪川曲（現八千代町）に陣を構えて将門と対峙するが、この軍も将門に撃破され、良正は良兼に救いを求めた。この戦いを静観していた良兼は、国香亡き後の一族の長として放置できず国香の子の平貞盛を誘って軍勢を集め、承平６年（９３６年）６月２６日に上総国を発ち将門を責めるが、将門の奇襲を受け敗走、下野国（父技研）の国衙に保護を求めた。
将門は下野国国府を包囲するが、一部の包囲を解いてあえて良兼を逃がし、その後国衙と交渉して自らの正当性認めさせ帰国した。
同年に源護によって出された告状によって朝廷から将門と平真樹に対する召還命令が出て、将門らは平安京に赴いて検非遣使庁で尋問を受けるが、承平７年（９３７年）４月７日の朱雀天皇元服の大赦によって全ての罪を赦された。帰国後も、将門は良兼を初め一族の大半と対立し、８月６日には良兼は将門の父良将や高望王など肖像を掲げて将門の常羽御厩を攻めた。この戦いで将門は敗走し、良兼は将門の妻子を連れ去った。だが弟たちの手助けで９月１０日に再び出奔し将門の元に戻ってしまった。妻子が戻ってきた将門は、朝廷に対して自らの正当性を訴えた。朝廷は同年１１月５日に太政官符を出した。これを公的には馬寮を攻撃した良兼・貞盛らに対して追討の官符を将門が受け取ったので、これを機に良兼らの兵を筑波山に駆逐し、それから３年後に良兼は病死し、将門の威勢と名声は関東一円に鳴り響いた。

平将門の乱

承平年間頃に武蔵権守となった興世王は、新たに受領して赴任してきた武蔵国守百済貞連と不和になり、興世王は認知を離れて将門を頼るようになる。また、常陸国で不動倉を破った為に追補令が出ていた藤原玄明が庇護を求めると、将門は玄明を匿い常陸国府からの引き渡し要求を拒否した。そのうえ天慶２年１１月２１日に（９４０年）軍兵を集めて常陸府中（石岡）へ赴き追補撤回を求める。常陸国府はこれを拒否するとともに宣戦布告をしたため、将門はやむなく戦うことになり、将門は手勢千人余ながらも国府軍３千人をたちまち打ち破り、常陸介藤原維幾はあっけなく降伏した。
国衙は将門軍の前に陥落し、将門は印綬を没収した。
結局この事件により不本意ながらも朝廷に対しても反旗を翻す形になってしまう。

将門は側近となっていた興世王の進言を受け、同年１２月１１日に下野に出兵、事前にこれを察知した下野守藤原弘雅・大中臣完行たちは将門に拝礼して鍵と印綬を差し出したが、将門は彼らを国外に放逐した。
続いて同月１５日に上野に出兵し、迎撃に出た介藤原尚範（上野国は親王任国の為、介が最高責任者となる）を捕えて助命する代わりに印綬を接収して国外に追放した。１９日には指揮官を失った上野国府を落とし、関東一円を手中に収めた。八幡神と菅原道真の霊の神託が降りたことにより「新皇」と自称するようになり、独自に徐目を行い岩井（坂東市）に政庁を置いた。即位については、舎弟平将平や小姓伊和員経等に反対されたが、将門はこれを退けた。菅原道真の霊がここで登場するのは、道真の子息たちが東国の国司に任命されており、特に藤原兼茂は承平年間の後半ごろに常陸介であっただけでなく、「扶桑略記」に彼が父・道真の霊と対話したという逸話が記されていることを兼茂が常陸でこのことを語ったことが、将門の「新皇」即位に影響したとの説がある。
新皇将門による諸国の徐目と素姓
・下野守―平将頼（将門の弟）　・上野守―多治経明（陣頭・常羽御厩別当）
・常陸介―藤原玄茂（常陸掾）　・上総介―興世王（武蔵権守）　・安房守―文屋好立（上兵）
・相模守―平将文（将門の弟）　・伊豆守―平将武（将門の弟）　・下総守―平将為（将門の弟）

将門の謀反の報は直ちに京都にもたらされ、同時期に西国で藤原純友の乱の報告もあり、朝廷は驚愕する。
直ちに諸社諸寺に調伏の祈祷が命じられ、翌天慶３年（９４０年）１月９日には源経基が以前の密告が現実になったことが賞されて従五位下に叙され、１月１９日には参議藤原忠文が征東大将軍に任ぜられ、忠文は屋敷に帰ることなく討伐軍長官として出立したという。
同年１月中旬、関東では将門が兵五千人を率いて常陸国に出陣して、平貞盛と維幾の子為憲の行方を捜索していた。１０日間に及ぶ捜索しても貞盛らの行方は知れなかったが、貞盛の妻と源扶の妻を捕えた。将門は兵に凌辱された彼女たちを哀れみ着物を与えて返している。将門は下総の本拠へ帰り、兵たちを本国へ帰国させた。この一連の行動が、浅はかな行動と評価されており、事実その足場を固めなければならない大事な時期に貞盛らの捜索のために無駄な時間と兵力を使ったことは、後々の運命を見ると致命的な原因となっている。



将門の所に間もなく、貞盛が上野国押領使の藤原秀郷と力を合わせて兵４千人を集めているとの報告がはいる。将門は諸国から召集していた兵のほとんどを帰国させて居たこともあり手元には１千人足らずしか残っていなかったが、時を移しては不利になると考えて２月１日を期して出撃した。将門の副将藤原玄茂の武将多治経明と坂上遂高等は貞盛・秀郷軍を発見すると将門報告もせずに攻撃を開始するも、元来老練な軍略に長じた秀郷軍に玄茂軍は瞬く間に敗走した。貞盛・秀郷軍にはこれを追撃し、下総国川口にて将門軍と合戦となる。将門自ら陣頭に立って奮戦したために貞盛・秀郷等もたじろぐが、時が経つに連れ数に優る官軍に将門軍は押され、遂に退却を余儀なくされる。この手痛い敗戦により追い詰められた将門は、地の利のある本拠地に敵を誘いこみ起死回生の大勝負に仕掛けるために幸島軍の広江に隠れる。しかし貞盛・秀郷らはこの策に乗らず、勝ち戦の勢いを民衆に呼びかけて更に兵を集め、藤原為憲も加わり、２月１３日に将門の本拠地石井に攻め寄せ焼き払う「焦土作戦」に出た。
これによって民衆は住処を失い路頭に迷うが、追討軍による焼き討ちを恨むよりも、将門らにより世が治まらない事を嘆いたという。

当の将門は身に甲冑を付けたまま貞盛等の探索をかわしながら諸処を転々とし、反撃に向けて兵を召集するが形勢は悪く思うように集まらない為に攻撃に転ずる事が出来ず、わずか手勢４百人を率いて幸島郡の北山を背に仁を引いて味方の援軍を待った。しかし、味方の来援より先にその所在が敵の知る事となり、少数の兵のまま最後の戦いの時を迎える事となった。

２月１４日未申の刻（午後３時頃）連合軍と将門の合戦が始まった。北風が吹き荒れ、将門軍は風を背負って弓矢戦を優位に展開し、連合軍を責め立てた。貞盛方の中陣が襲撃をかけるも撃退され、貞盛・秀郷・為憲の軍は撃破され軍兵２千９百人が逃げ出し、わずか３百余りを残す事となってしまった。しかし、勝ち誇った将門が自陣に引き返す途中、急に風向きが変わり南風になると、風を背負って得た連合軍はここぞとばかり反撃に転じた。将門自ら馬を駆して陣頭に立ち奮戦するが、風のように駿足を飛ばしていた馬の歩みが乱れ、将門も武勇の手だてを失い、飛んできた矢が将門の額に命中し、あえなく討死した。

将門の首は平安京に運ばれ、さらし首となった。獄門が歴史上で確認される最も古く確実な例が、この将門と言われています。

将門の乱は、ほぼ同時期に瀬戸内海で藤原純友が起こした乱と共に「承平・天慶の乱」と呼ばれている。

将門は、日本三大怨霊の一人になっている

怨霊とは、自分が受けた仕打ちに恨みを持ち、祟りをしたりする、死霊または生霊のことである。

日本三大怨霊とは、古くは平安時代の菅原道真や平将門、崇徳天皇などの歴史上の政争や争乱にまつわる祟りの伝承などが有名。

菅原 道真

平 将門

崇徳天皇

・将門の首伝説

将門の死後、その首は七条河原に運ばれ「さらし首」の刑になったが、何か月経っても生きているように目を向いて腐らず、夜な夜な「私の胴体はどこにあるのか。持ってこい。首を繋いでもう一戦しよう」と叫び続けたと言われている。

将門の首は「ケタケタ」と笑い出し、関東目掛けて高く飛んで行ったが、途中力尽きて落ち、そこに首塚が築かれたという。東京都千代田区大手町に「将門の首塚」が、「胴塚」は坂東市の延命院にある。

市原市（市原郡）内の将門伝説と遺跡

平親王山　（菊間新皇塚古墳）

所在地　　市原市菊間

将門はこの地に来て「平親王山」と呼んで、丘陵北端に「都の北野」を擬した館を構えたと言われている。また、墳頂には将門塔と呼ばれる宝篋印塔が祀られていたが、現在は宅地造成の為惣社にある「上総国分寺」に移設されている。

将門塔（市原市指定文化財）

所在地　市原市惣社　上総国分寺境内

「上総国分寺仁王門前」にある「将門塔」は、菊間新皇塚古墳に祀られていた宝篋印塔ですが、宅地造成のために移設された。基礎部には「応安第五（１３７２年）壬子」「十二月三日」の銘が刻まれているが将門の命日とは違い更に塔の形式も南北朝時代と考えられ、将門と結びつく点がない。

奈良の大仏

所在地　　市原市奈良字大仏台２６９番地２

千葉県にある「奈良の大仏」は、初代は承平元年（９３１年）に建立された銅製の廬舎那仏であったと言われる。下総付近で朝廷に対して反乱を起こした「平将門」が新皇を名乗り、この地の北方に京を模した自らの都を構えた際に、京の南に奈良の東大寺の大仏模して仏像を建立したものと言われる。

昭和４９年（１９７４年）６月１０日に市原市の名勝に指定されているが、史実としての裏付けに欠ける為、史跡ではなく名勝として指定された。

江戸時代中期の儒学者　中村国香（１７１０～１７６９）は著した「房総志料」によれば、当時の奈良村には銅製の廬舎那の露仏が存在していた。廬舎那仏とは、華厳経の本尊で太陽の意味。智慧の光であまねく法界を照らし輝かす仏身。

> 市原郡の人語りしは、奈良村といふ所の山中人跡まれなる処に、銅製の高丈餘の盧舎那の露仏、儼然として叢間に安置す。榛荊を發き拝するに、基礎半ば土に陥り、銅上盡青衣を生ず。凡幾星霜を経たりといふ事知らずと。按に、承平中、平将門東百官などいふ事置きし日、南都の銅佛に模倣せしにや。しかれども、自立の日久しからざれば、精舎を建てるに暇なしと見へたり。事実の傳はからざるは、後人其僭竊を悪み、且、國禁をはばかれるにや。いぶかし。　【房総志料】より

その後、幾度か作り直され、現在のものは文化元年（１８０４年）に建立された等身大（像高１．７ｍ）の石製立像です。

２０１１年３月の東日本大震災では像が台座から落ちて損壊したが、市原市と住民が費用を折半して修復されることとなり、１１月には修復が完了した。

奈良の大仏。現在は石製仏像

市東城　（中野城）　光徳寺敷地内

所在地　　市原市中野　１２３番地

築城時期は平安末期から戦国期と思われるが不明

築城主　平将門とも言われるが、定かではありません。（平忠常という説もある）
また、土気城主の酒井氏や志藤郷の豪族の城とも言われている。

説明　　市東城は、中野の高台にあり現在は光徳寺の敷地になっている所が城址と思われる。光徳寺入口には「光徳寺　市東城跡」などと記載されている。
鐘楼の建つ所は高さ３ｍほどの方形の土壇となっており、かつては櫓台の跡と言われている。その背後には土塁が続き、その下には腰曲輪があり、急な崖となっている。他の遺構は残されていませんが、この規模からすると台地上の居館と思われる。
光徳寺の境内には「五百羅漢像群」があり、表情がすべて違うという。

光徳寺に建つ鐘楼。櫓台跡と言われる

それぞれ表情が違うという五百羅漢仏像

平親王野（将門山）と桔梗塚の碑（平野神社境内）

所在地　　市原市永吉１１５番地

説明　　創立年代は不明ですが、延宝４年（１６７６年）の棟札がある。平将門がこの地に来て滞在した処を「平親王野」あるいは「将門山」と呼ばれている。
将門山には、「桔梗塚」があり、桔梗は将門の側室で、藤原秀郷の妹と言われているが、秀郷のスパイとして将門の側室となり、将門の乱の際には秀郷に将門の隠れ場所を教えたと言われ、館から逃げる際に桔梗塚（現浜野カントリークラブ敷地内）で見つかり自刃して果てたという。
村人がそれを哀れみ、塚を築いて葬ったと言われ、記念碑が平野神社に建っている。

将門館

所在地　市原市奈良

説明　　奈良の大仏の近くに「屋敷台」という小丘があり、将門館と伝えられている。
この地の将門伝説は、実はすべて領主であった平忠常に関するものではないかと言われる。

犬成地区

地名の由来で、寺院の境内を意味する「院内」の転訛ですが、新皇と称された「平将門」が行幸したことから「院内（いんあり）」と称され、それが転訛し「犬成（いぬなり）」となったという。
地域内に史跡として、犬成城址・犬成向井山城址、神社としては犬成神社、寺院では安立寺（日蓮宗）がある。

勝間地区

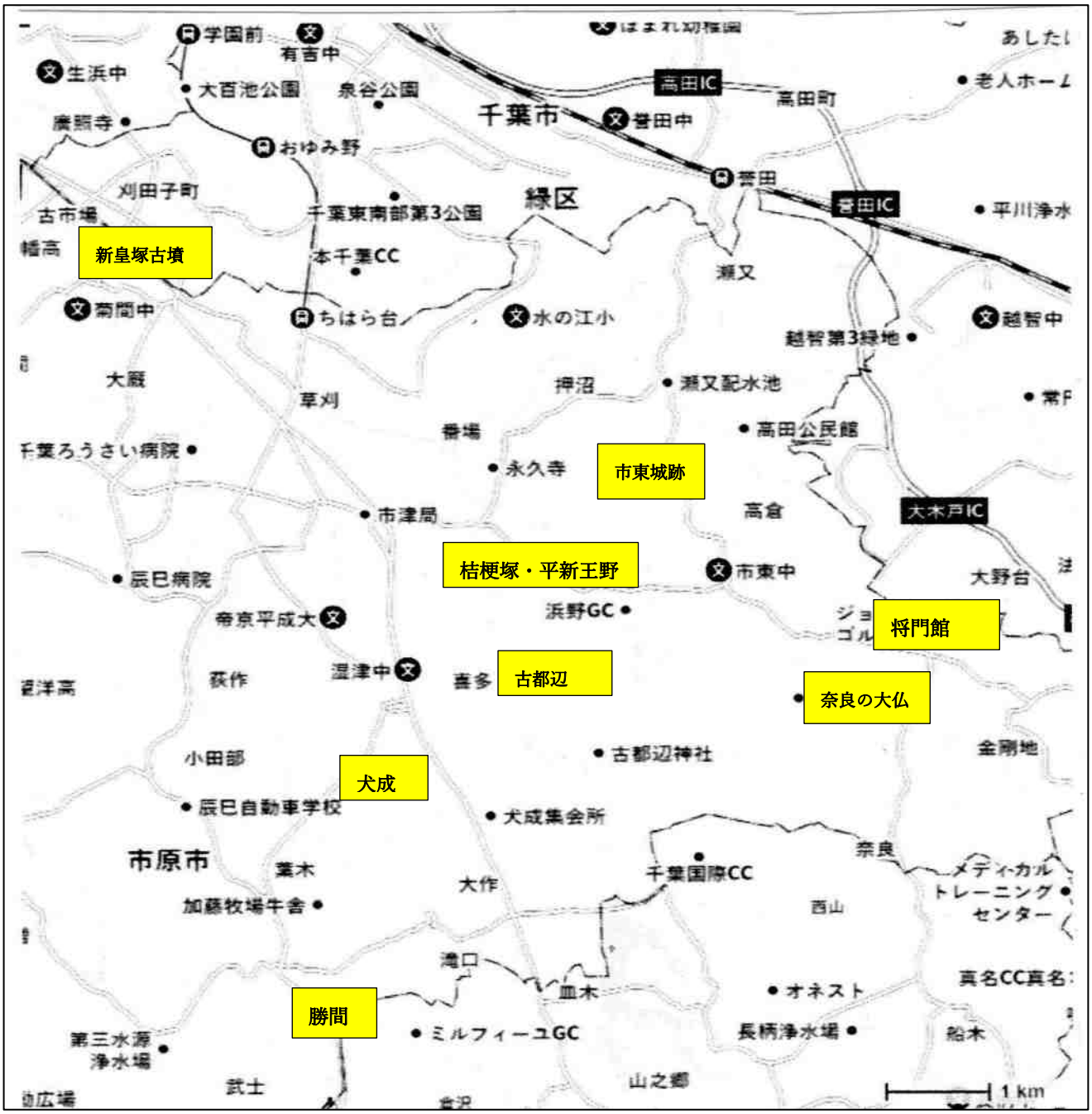
地名の由来で、平将門に敵対する人がこの地にて、将門に勝つように願いを込めて「勝将（かつまさ）」とつけたのが「勝馬（かつま）」となり、「勝間（かつま）となったという。

地域内に史跡として「勝間館」が、神社として日枝神社、寺院として龍性院（真言宗）がある。

古都辺地区

地名の由来で、平将門が大字奈良の地に居館し、大和の南部に擬してその地を奈良と称したが、自身は相馬に移った後も妃や妾を住まわせたので、都の名残り、古い都の付近にあるという意味で「古都辺（こつべ）」と名付けたという。地域内に神社として古都辺神社、寺院として行福寺（日蓮宗）がある。

市原郡内の将門伝説に関する地図



制作・編集　上総の国いちはらを知る会　０９０―３５４５－１１１３

※この資料は、市原史誌・Wikipedia・寺社にまつわる伝説・いちはら歴史の旅人・他を参考資料に作成しました。